

菊池寛文學全集 第六卷

文藝春秋新社

菊池寛文學全集

第六卷

五〇〇円

昭和三十五年六月二十日發行

發行所

文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替 東京七八七四三

著者 菊池 寛
發行者 車谷 弘

© 1960

印刷・大日本印刷
製本・中島製本
製函・加藤製函

目

次

わが文芸陣

小説家たらんとする青年に与う	一五
短篇の極北	二〇
漱石先生と我等	二三
晩年の上田敏博士	二七
暗黒時代	三一
芥川のこと	三三
志賀直哉氏の作品	三六
戯曲家としての武者小路氏	四四
広津和郎氏に	四七
芸術と天分	五三
ある批評の立場	六一
浪漫主義の本質	六五
批評家の権限	六九
印象批評の弊	七三
主流と傍流	七八
芸術家と後世	八二

文芸作品の内容的価値

九〇

再論『文芸作品の内容的価値』

九七

小説の筋

一一三

小説家

一一五

新聞小説難

一一七

人間的義理

一二〇

文壇の政治趣味

一二三

冷眼居雑筆

一二四

『父帰る』の事

一三二

抗弁その他

一三八

文藝春秋

文藝春秋

一四九

番外不同調

一七五

新年創作評

一八〇

戯曲月評

一九一

雑誌と創作

一九七

震災文章

火の子を浴びつつ神田一つ橋間を脱走す 二二一

災後雑感 二三三

落ちざるを恥ず 二二五

地震の影響 二二七

災後雑感 二二九

雑記 二二五

喧嘩過ぎての強がり 二二九

清算 二二二

作家と政治

身辺雑事 二三七

その月その月 二四四

或日来た人達 二五〇

小説家協会のこと 二七一

著作権の確立 二七五

著作権改正に就て 二七八

帝劇との契約に就て	二八〇
映画検閲について	二八三
映画検閲の非道	二八五
『坂崎出羽守』問題の世評に就て	二八七
迷惑な伝説	二八九
講演	二九一
蓄財	二九五
雑事	二九六
人と時	二九八
裁判傍聴	三〇〇
易と手相	三〇二
特診	三〇六
悪口	三〇九
人の世話	三一〇
朝の世話	三一〇
憂鬱な結婚	三一一
あくまでも現実万能	三一二
チャランケ	三二四
	三二五

雑誌及び雑誌記者	三二〇
『阪神見聞録』附録	三二三
宣 伝	三二五
人 格 と 小 説	三二七
権 力	三二九
社会主義に就て	三三一
一 人 力	三三三
手 段	三三五
社会運動と金	三三六
タクシの常客として	三三七
朝鮮文学の希望	三四一
文 芸 欄	三四三
ゴ シ ッ プ	三四五
予 想	三四七
時代と作家	三四九
小 説 雑 感	三五〇
返された原稿	三五二
文芸と人生	三五四

三二〇
三二三
三二五
三二七
三二九
三三一
三三三
三三五
三三六
三三七
三四一
三四三
三四五
三四七
三四九
三五〇
三五二
三五四

文壇の生存競争	三五七
生活活期	三六〇
既成対新進	三六一

旅 その他

長崎への旅	三六五
南蛮誓詞	三七一
予の浅草観	三七三
将棋の話	三七七
釣	三八一

友と人との印象

文壇交友録	三八五
芥川の印象	三九〇
最近の芥川竜之介氏	三九三
滝田氏に就て	三九五
里見弴氏の印象	三九七
新劇界の志士	四〇〇

島田清次郎を憫む

四〇二

平沢計七

四〇五

記者としての回想

四〇七

新聞記者時代

四一二

貧乏の経験

四一五

自分の名前

四一七

私の日常道德

四一九

新思想と我々

四二二

立候補について

四二五

敗戦記

四二八

沢田の死

四三三

碁の手直り表

四三五

横光君のこと

四四二

其心記

四四六

プロレタリア芸術論

芸術本体に階級なし

四五三

芸術に階級なし

四五六

レットテルだけでは駄目だ

四五八

プロレタリア文芸に対する疑問

四六〇

階級と芸術

四六三

思想的潔癖

四六五

前田河広一郎に

四六七

千葉亀雄氏に

四七〇

中西伊之助君に

四七三

乞う入れ代らん

四七五

駁論 二三

四七八

演 劇 評 論

一幕物に就て

四八五

劇と異常事

四八八

劇作振興の為に

四九〇

女性尊重主義と近代劇の運動

四九二

見物の笑い

五〇一

歌舞伎芝居

五〇三

殿堂演劇

五〇四

補

註文で書く戯曲	五〇五
自作上演の回想	五〇六
文芸の映画化未し	五一一
劇及び劇場について	五一三
演劇私議	五一九
愛蘭土劇紹介	五二七
シンゲ論	五三五
ゴルスワージーの社会劇	五五二
遺	
利根川の旅	五八三
解説 河上徹太郎	五九九

菊池寛文學全集

第六卷

編纂委員

中 永 河 小 川 山

村 井 盛 林 端 本

光 龍 好 秀 康 有

夫 男 蔵 雄 成 三

わ
が
文
芸
陣

